

ペン俳句会 臨時句会報(第三六三号)

兼題『紅葉』、席題『深』

十一月度は明治神宮吟行だったが、雨天の場合を考え、通常と同じ六句投句、リモートで六句選句。投句者九名。

松田 一文字

峡(かひ)を行くトロツコ列車紅葉山

天高し崖下に寄せる白き波

風さやか登り着きたる城の庭

秋深し大聖堂のミサの声

秋夕陽海に光の帯延びて

時雨るるや修道院の傘の列

中村 晃也

玉垣の枯れを深める神の杜

吊り橋を渡りて寄りの峪紅葉

淡々(あわあわ)と日差し過ぎ行く薄紅葉

味噌の香と土の匂いの根深汁

夕入日葉裏透けたる紅葉かな

百年の神社の杜や蔦紅葉

宮原 凧

食卓に読みかけの本豊の秋

終活の日毎に延びし秋霰雨

川沿いを足向くままに秋日和

紅葉葉を一枝(いつし)添えある宿の膳

女子会や黄葉を背に露天の湯

秋深む佳境に入りし嘆異抄

長尾 進一郎

天高し巨木ひしめく神の森

紅葉(こうよう)を躊躇ふ木々や秋温し

豊作や車窓流るる黄金色

歓声の空へ轟く運動会

秋風や近ごろ増へし物忘れ

高空に淡き雲浮き秋立ちぬ

大津 そうかい

穂芒の揺ることなき静寂かな

歳時記の繰りても尽きぬ夜長かな

深窓の令嬢秋の薔薇深紅

逆上り出来し笑顔や天高し

コスモスや好きキヲヒ好きキヲヒ好き

ひと片の紅葉選りたり見せばやと

浜口 金魚姫

彩りの重さの紅葉はらはらり

色付く実見守り見届け柿紅葉

ふわふわ風より軽く草の絮

団栗に繋ぐ手の隙埋めて欲し

母の手帳繰ればはらりと柿紅葉

渡されし本に葉よ秋深し

安藤 晃二

青々と楓頭上に彼岸花

大樹這ひ魁となる蔦紅葉

ロータリー桜紅葉の林立し

竹葉のいろどり深し秋兆す

茅葺の里を彩る唐楓

秋暑し懸命に染む花水木

志村 良知

柿到来思案しどころお裾分け

遠富士の冠雪は未だ文化の日

安曇野は秋深まれり友の声

老猫逝く山茶花大樹花盛り

木犀の長き並木に立ちすくみ

麗らかな日に映ゆ木々は薄紅葉

西川 知世

長月の書き込み多き問診票

鶏頭の柔き緋の色入日中

パンパグラス呆と膨れて月の下

人間失格父の蔵書と温め酒

獅子の像と秋陽と人を待つてをり

坂多き町に住み古りざくろの実

以上